

同志社を同志社たらしめた青年たち－熊本バンド

原 誠	同志社大学神学部長 同志社大学神学部教授 日本キリスト教団正教師
講師紹介【はら・まこと】	【研究テーマ】 日本とアジアのプロテスタント・キリスト教会の歴史

「熊本バンド」とは何か

この科目は、通常は宗教学という科目、同志社とキリスト教という主題でなされています。あわせて、宗教科の教員免許を取る人々には、必修の科目でもあります。キリスト教主義の学校で働くということになりますから、ただ単なる知識を伝えるということではなく、その根底にある思想とか価値観みたいなものや、キリスト教主義学校はどういうふうな形で成り立っているのかということを考える材料にもなります。

今日は、ご紹介いただいたように、スピリットウイークとの絡みで、授業のスケジュールが「熊本バンド」になりました。熊本バンドというのは、どういうことかというのを最初に言います。バンドというのは、隊とか、班とかいう言葉でありまして、プラスバンドとかロックバンドとか、そういう言葉として今日も残っています。グループのことです。日本にプロテスタントのキリスト教が伝えられた、あるいは日本に宣教師がやってきたというのは幕末のことです。宣教師をとおして、禁令下の日本でキリスト教を学びたい、知りたいという人たちが生まれてきます。それは、誰なのか。旧幕府側の下級藩士たちです。いくつかの教え方がありますが、通常は、横浜で生まれたグループと、札幌で生まれたグループと、そして今日ご紹介する熊本で生まれたグループ、この三つのバンドが、日本のキリスト教の源流といわれています。

明治政府は、薩摩・長州・土佐・肥前を中心に生まれた薩長藩閥政府といわれるものです。ということは、おそらく、今日の私たちの理解を超えるぐらい、非常に厳しい報復措置が執られました。誰に対してか。徳川（旧幕府）方です。同じ日本人でありながら、属した藩が違う、ということと、非常に厳しい報復措置が執られ、そして徳川方はほとんど放り出されてしまっただけです。徳川の時代には二六〇ぐらいの藩がありましたが、廃藩置県・版籍奉還となります。版籍奉還というのはどういうことか。殿様が、自分の持っていた所領を「全部天皇様にお返し申し上げます」ということで、藩がなくなります。その第一段階で明治政府は、それまでの藩の殿様を県知事にします。その次に、三つから四つ、五つの藩を集めて、一つの県にします。その県には、明治中央政府が県知事を派遣していきます。一度完全に武士階級は失職します。もっていた禄高、五〇〇石とか三〇〇石とか二〇〇石とかの禄高によって違いますけれども、六パーセントの金利がついた国債をもらって失職するわけです。これは、明治政府方も徳川方も一緒です。そののち、明治政府方であれば、地方の役人、小学校の教員、軍隊、警官の職を与えます。徳川方は完全に干されてしまう。そうなる、「いかにして、我が没落した家を再興するか」が課題です。そこで考えたのは知識です。西洋文化に対する知識、あるいは英学。英語を学んで立身出世をして、我が家を没落から回復させようとする。その目的で宣教師から学ぼうとします。が、宣教師が与えようとしたのはキリスト教でした。多くの武士階級は知識を求めた。しかし、少数の人たちが、宣教師の人柄に触れて、キリスト教を学ぼう、そういうふうな想いにひかれていく、その人たちが「横浜バンド」でありました。今日の話は熊本であるけれど、その前に、話の展開の順序として、パラレルで興味深いので札幌の話をして。

熊本バンドについて、ちょっと文献をご紹介します。皆さんの中で、本気で熊本バンドというのをしっかりと研究して、卒業論文で、あるいは大学院でやりたいという、そういう人が出てくるのを期待しています。そのような人たちのためには、同志社大学の人文科学研究所がつくった『熊本バンド研究』という、詳細な本があります。古本屋で二万円くらいします。なかなか手に入りません。膨大な、貴重なものです。しかし、「こんなのはちょっと、よう読まんよ」というのであれば、ちょっと古い本ですが、『近代日本の青年群像－熊本バンド物語』があります。これは物語ですので、非常に読み易いです。一時間半くらいあれば、皆さん方でしたら読めると思います。図書館に行けばあるはずですから、調べて、読みたければ読めると思います。それで、熊本バンドのことについて言えば、『ラストサムライ』という映画がありましたね。あれもアメリカ人でありましたが、ジェーンズという人物が、熊本バンドにかかわりました。そのジェーンズについての本があります。残念ながら、同志社大学から出たものではありません。法政大学から出ました。『アメリカの侍』という、極めて詳細なジェーンズについての評伝です。

冒頭に申し上げておきます。大学とか学校というのは、何が求められるかということ、一番に、いい教師、いい設備。もちろんいい事務職員・スタッフ。そういうものが絶対に必要です。しかし、私の理解するところによれば、学校が学校になるためには、学生がいなければいけない。学生がいなければいけない。一八七五年に同志社が創立されました。同志社という入れ物をつくったはいけれども、入学したのは八名です。しかし、一人も卒業できませんでした。第一回卒業生は、全員が、今からご紹介する熊本からの人間です。同志社は、熊本の青年の血で満ちるところによって、実に、同志社が同志社になりました。いくら新島が偉くても（新島を神様のように誉めそやしませんけれども）、しかし、同志社が同志社になるためには、学生が必要であった。このこと抜きには、同志社が同志社にならなかったということ。しかも、その熊本と札幌との比較のなかで、今日はご紹介したいと思います。

「札幌バンド」について

札幌バンドの話をして。たぶん“Boy’s be ambitious.”という言葉で、皆さんは聞いたことがあると思います。その言葉で有名なクラークは、アメリカのマサチューセッツ州立農科大学の校長でしたが、お雇い外国人のひとりとして休暇をもらって日本にやってきました。札幌につくられた札幌農学校の教師として赴任します。一年間の契約でありました。そのときに、二、三人の助手を連れてきています。札幌農学校は、現在の北大農学部であります。簡単にエピソードだけをご紹介します。彼が札幌に赴任するとき、同じ船に乗った人がおりました。その人間は、のちに総理大臣になる人物でありました。二人は会って、相談をするわけです。どういう学校にするか。クラークは聖書を持ってきていました。「学生に聖書を配りたい」「学校は国立の学校だから、聖書を配ってはいかん」というので、双方論争を繰り広げるわけですが、ついにクラークが勝ちます。クラークが札幌農学校に赴任したときに、最初に朝礼があって、聖書を読んで、キリスト教の考え方の要約したものを教えて、お祈りをして、そして授業が始まりました。札幌農学校は国立の、しかも農学校というわけですから、自然科学の学校でありながら、回顧するところによると「全部修身の時間のようにであった」と書き遺しています。

そして、これが重要だと思っているのですが、学校には規則があります。同志社大学にもたくさん規則があります。学費をいつまでに払えだとか、登録をしないと授業が取れない云々。皆さん方も、私たち教員もそうですけれども、煩雑な事務システムの中にあります。クラークは、その規則を全部捨てさせてしまいました。規則はただ一つ、“Be gentleman”です。今であれば、“Be lady and gentleman”ですね。つまり、欠席をする、遅刻をする、居眠りをするなかで「あの先生、出席さしつし、何回出席しなきゃ、試験受けさせてもらえないぞ」ということを学生は考えるわけですが、そういうのを全部やめにして、自分の良心に聞いて、それで自分の良心に照らして正しいと思えるかどうか、判断基準であり、それが規則だ、“Be gentleman”となります。そして、彼は札幌を去るときに「イエスを信じる者の契約」という文章を書いて、一人ひとりにサインをすることを要求しました。一年の間（正味は一年ないのですが）、クラークに人格的に非常に深く影響を受けた札幌農学校第一期生は、みんなクラークの教えに従って、そして勤めに従ってサインをしました。しかし、この一期生の中からは、歴史上に名を残す人は出ておりません。そして二期生、内村鑑三や新渡戸稲造などが出てくるわけです。

そのあたりの、明治初期の青年たちの物の考え方を、そしてキリスト教とかかわりを知るのに、非常に興味があるのは、『How I became a Christian』です。「余は如何にして基督教徒となりし乎」という本です。内村が「赤貧洗うが如く」と、金が無くって本当に困っていたときに、彼は英語でこの本を書きます。これが日本語に翻訳されて、全世界で七カ国語か八カ国語に翻訳されました。つい先ごろまで韓国を、し、「ハラクリ」「サムライ」とやっていった日本が、新しく文明世界に加わってきた。「ラストサムライ」みたいなものですね。その当時でも、東洋の神秘的な国であった日本に興味と関心があったために、この本は爆発的に売れたわけでした。そのなかで、内村鑑三ら第二期生のエピソードが記されています。内村鑑三自身は、典型的な高崎藩、松平・徳川方の藩の子供であって、江戸藩邸で生まれ、明治維新になって没落します。何とかしなければと英学を学び、英語を学び、知識を身につけて、実力で明治政府のなかで内村家を再興させようと思って、札幌まで行くわけです。彼の回想によるとこうです。

二期生がぞろぞろ札幌に着いた。そうすると、当然、一期生が迎えてくれるものだと思っていたら、誰も迎えてくれない。しかし、中に誰かいそうだ。寮に着いたら、中で明かりが漏れているから、人がいるわけだ。先輩がいるわけだ。当然先輩たちは、我々二期生を迎えてくれると思っていた。誰も迎えてくれない。なぜか。

後で分かったことだけれども、一期生は教師もいないのに、クラークがアメリカに帰ったのに、自分たちで聖書を読んでお祈りをしている。二期生はたどり着いたら、札幌の学校がキリスト教ばかりになっていて度胆を抜かれるわけです。寮生活なので、一期生が、二期生の新入生に対して「おまえらな、これにサインしろ」と、こう、圧力をかけるわけです。多くの学生は嫌々ながら、あるいは喜んでか、サインをするわけです。内村は、「大っ嫌い」と。内村に関していうと、小さいときから、神社の前を通ると拍手（かしわで）を打って、お寺の前を通るとゴーンとやって、という一般的な意味での宗教心に溢れる人間でありました。「耶穌（やそ）、冗談じゃない」と思っていたところへ、先輩からプレッシャーをかけられて、皆バタバタとサインするのに、最後の一人になりました。これ以上やったらいじめにあうというので、彼はサインをするわけです。それが内村鑑三なのです。その中にいたのが、当時は、佐藤といいましたが、新渡戸稲造です。後に新渡戸に婿に入るわけです。かつての五千円札でしたね。

そういうわけで、クラークが札幌を去るときに言ったのが、“Boy’s be ambitious.”という言葉でありました。ここを注目して聴いて欲しいと思います。今の時代のなかで、企業を興すことを勧めるためのさまざまなプログラムを大学が展開するとか、「ホリエモン」ではないけれども、学生の間企業を興して、サクセスストーリーまっしぐらなんていうのがありますね。それ自体、別に悪いことではないのですけれども、そういうときのイメージとして、“Boy’s be ambitious.”と重ね合わせていくならば、クラークの考えていることと

まるで違う、水と油だということをお分かりいただけますでしょうか。クラークが考えていた“Boy’s be ambitious.”っていうのは、良心を基準に考えて、しかもキリスト教の聖書の基準で、自分の全生涯を挙げて働くということがアンビシャスなのだ、となります。この意味を、ぜひ分かっていたいただきたいと思います。ここで申し上げておきたいことは、クラークの場合は、ギンギシとキリスト教を叩きこんだ、学生たちに教え込んだということです。

熊本洋学校とジェーンズ

さて、熊本バンドの話です。熊本はどういう藩であったかという、先ほどから繰り返しているように、薩摩・長州・土佐・肥前方でありました。つまり、徳川方ではなかったのです。ですから本来だと、明治政府の側で、権力を得(う)るに近いところにいたはずなのです。しかしながら、その幕末の戊辰戦争のなかで、細川藩は、外様の大名でありながら、活躍することができませんでした。薩摩・長州・土佐・肥前の四藩は、明治政府をつくるために多くの血を流し、そして力を注ぎ、藩を挙げて、全力を挙げて明治政府をつくるのに貢献をしたのです。けれども、外様でありながら活躍をしなかったということで、明治政府にポストがないというわけで、何とかしなければというのが、熊本のテーマとなりました。

それで、熊本では県による学校を二校つくりました。一つが医学校でありました。西洋医学の学校、熊本県立医学校をつくったわけです。地理的に熊本のすぐそばは長崎です。長崎は、長い徳川の時代、出島があって、蘭学の拠点になっておりました。長崎からフェルトという教師を招いて、医学校ができました。この医学校から生まれた人物が、北里柴三郎です。世界的な細菌学者となった人物です。東京に北里大学という名前が残っています。こういう人物が生まれていくわけです。

もう一つ、つくろうとしたのが洋学校でありました。これが、熊本洋学校の設立です。一八七〇年でありました。この洋学校に集まった学生、生徒たちは、ずば抜けて優秀であったわけです。募集要項によりますと、県立の学校であるということ、教師を外国から招くということ。そして、今でいうとちょっと差別的ですが、「士族階級にこだわられません」となっていました。どの階級でも、私たちのリアリティーではないですよ。今はもう皆、平民ですから。

とにかく、徳川の時代は士農工商であった、決定的に大きなものであったのが、明治維新になってから変わります。天皇・皇族・貴族・士族・平民・新平民(被差別部落)となります。貴族の中に、伯爵とか公爵とか男爵とか子爵というのができて、先ほどの殿様階級は皆その貴族の中に入れて、多くは士族だけのプライドを貫いて、失職します。あとは県の公務員であるとか、軍隊であるとか、警官になります。士族としてのプライドを持っている人も、没落する者もいれば、まずまずぼちぼちという者もいます。そういうのが身分制の大転換、社会の大変動であったわけですが、そういうなかで、言葉としてはおかしいと思いますが、「すべての階級・階層に対してオープンな、頭が良ければ」ということで熊本洋学校ができます。

先ほど私は、学校が学校になるためには、生徒が必要だと言いました。しかし、生徒が来るまでの間、何が必要かという、学校は教師が必要です。教師を求めなければなりません。熊本が、どういう形で教師を求めることができるか。チャンネルがあるのか。ないのです。ちょっと余談になりますが、キリスト教主義の学校は、アメリカの宣教団体と非常に深い関係が歴史的にありました。それで、非常に優れた教師を、人格や英語能力、そして幅広い優れた教養を持った宣教師を招くチャンネルがありました。しかも、高い給料を学校側が払うのではなくて、宣教団体が払って派遣されてくるというのが、他の学校と決定的に違うところです。私立でも宗教・キリスト教を背景にしない学校、あるいは国立・公立はチャンネルがないのです。同志社は、新島とデヴィスによってスタートしたという、そのことの意味は、私たちが考える以上に大きいことです。

教師のリクルートのネットワークは、熊本ではどうしたか。熊本県は、当時の文部省、今でいうところの文部科学省に行きます。文部省には、そういうことのアドバイザーがいた。アドバイザーが、お雇い外国人です。お雇い外国人といいながら、実は、フルベッキ(ファーベック)という宣教師です。先ほど私は、「横浜バンド」そして「札幌バンド」の話をしました。横浜に行って働いていた宣教師がたくさんおりましたが、そのうちの一人が、フルベッキです。たぶんオランダ系アメリカ人だと思います。オランダ改革派の宣教師のフルベッキ、彼が、宣教師として東京で働きながら、文部省のアドバイザーとなって、東京帝国大学を作るためのシステム、カリキュラムをアドバイスする立場にいたわけです。熊本県から文部省にきた情報は、フルベッキを通して、アメリカに飛んでいくわけです。アメリカにリクルートの情報が、今でしたらインターネットで教員公募などは簡単にいくわけですが、こういうネットワークの中で、アメリカに情報がいて、それをキャッチして、行こうとなったのがジェーンズでありました。

ジェーンズという人物、オハイオ州出身、ウエストポイント(陸軍士官学校)出身、南北戦争に砲兵大尉として北軍に従軍します。そして戦争が終わったあと、農業をやっていました。夫人は会衆派教会の牧師の娘でありました。百姓をやっているよりも、何かもう少し大きなところで仕事ができないだろうかと考えていたところに、そのフルベッキをチャンネルとした、日本からの招聘の手紙が届くわけでありました。彼は、妻と子供を伴って日本にやってきます。一八七一年のことです。

私も一度熊本に行ったことがあります。熊本で調べてみたところ、すぐそばの長崎では、出島・中華街を含めて西洋人、外国文明と接する機会がたくさんありましたが、長崎の近くにありながら、熊本の領域に西洋人が足を踏み入れたことはなかったのです。そんななかで、初めて足を踏み入れたのがジェーンズ一家であったのです。船が着いて、奥みたいなものに乗って、熊本市内に着いて、彼らのために日本人の大工が造った建物に住んで、洋学校ができたというわけです。任期は三年、給与は月四〇〇ドルです。ゼンズ、「善斯」という字が当てられました。

月四〇〇ドルというのはどんなものか。この時代は一ドルと一円がほぼ等価でした。その四〇〇円とは、どんなものか。県知事の給料が一二〇円ぐらいのところですから、どんなに暴利をむさぼったかといったら、いささか笑ってしまいますが、ものすごいハイ・サラリーだったのです。たとえば、富岡製糸に技術者がくるというように、全国各地いろんなところでお雇い外国人が活躍して、日本人は西洋文明から学んだのです。それはどういう形かという、日本の明治政府がお願いをして機械を買って、運び込んで据え付けて、そして機械を動かすお雇い外国人を連れてきて、教えてもらって全部できあがった、日本人が使えるようになった、これが日本の資本主義の産業社会のしくみなのです。そうやって何千万円もかけて、機械を買って、機械を動かすようになって、安い値段で民間の資本家に下げ渡す。政府が財閥をつくっていく、産業資本家をつくる、これが日本のパターンです。ヨーロッパの場合は、それぞれの歴史的な展開の中で、少しずつ少しずつステップを経て、ブルジョアジーというのが生まれていくのに対して、日本では、急速に殖産興業・富国強兵というパターンで、大急ぎで西洋技術を学んで、民間に払い下げてというパターンを取るわけです。そのために、ものすごいお金を遣ったわけです。

ジェーンズの教育

いずれにしても、ジェーンズは、熊本にやってきます。生徒は、熊本・細川藩、その他の藩からでも、「この学校で勉強したいという人は、きていいですよ」というふうにします。ジェーンズの勉強の教え方は、すさまじく荒々しいものでありました。一人で英語を教え、地理を、歴史を、物理、化学、地質学などを教えます。毎回小テストをします。成績が良ければ前の席に、成績が悪ければ後ろの席にという厳しいものでありました。自学・自習、自分で学ぶことです。雑談めいた話ですが、「高校で日本史を勉強したけれども、世界史を知らん」というのは、もう「自分で勉強せえ」となります。一人前の社会人にふさわしく、「教えてもらってない」ではなくて、「自分で勉強せえ」です。そういうことで、一年目に徹底的に教え、そして二年目になりますと、「この科目はこの生徒が、あの科目はこの生徒が優秀である」ということが分かってくると、その生徒を、今でいうティーチングアシスタントに指名します。皆さん方も家庭教師などの経験がある人もいるかもしれませんが。教える側になると責任があります。一生懸命勉強して、そして教えなければならぬ。自学自習というやり方を取って、徹底的に教えます。今のように教科書が日本語になっているわけではないので、英語の原書をそのまま使って授業をするわけです。

契約の中に「第六条、学校生徒の学則は、カピテン・ジェーンズ氏に委任すといえども、習來の風俗を学び、かつ国学を勤むるため、かたわら漢学の教導を置き候ば、日用学則等は適宜の商議に及び決すべし」とあります。要するにカピテンというのは、キャピテンのことで、陸軍の階級の大尉のことで、学校の授業については、ジェーンズさんに委任するとあります。しかし、学生たちは日本人であるし、これまたリアリティーがあるのでしょうか。九州人というのは、今でも相当に保守的です。男尊女卑です。男の前で女がもの言っていないかと、そういう非常に厳しい、封建的な考え方が強いところでありました。そんな日本人の男の子、九州男児に教えるわけですから、漢学、儒学、儒教というのは、武士道精神として徹底的に叩きこむというわけです。授業は厳しく、順順が毎日変動する、徹底した知的教育です。一年目で、英語はリーダー、スペリング、グラマーを教える。二年目では、地理、歴史や代数、幾何、測量術、天文学を教えます。記録を見てみますとこういうことになっています。

一回目の入学生が四十六名、卒業できたのが十一名。

二回目の入学生が七十二名、卒業できたのが十一名。

三回目の入学生が四十名、卒業生なし。

四回目の入学生が三から四十名、卒業生なし。

この「なし」というのは今からご紹介いたします。学校が大混乱に陥って、もう閉鎖されてしまって、卒業生がいらないということになるのです。それぐらい、毎回毎回小テストをやって、後ろがずーっと続くと、もう駄目だ、退学となります。成績不良で退学です。

私も教師の一人として思うのですが、ジェーンズの場合もウエストポイント(陸軍士官学校)の出身で、与えられた教育、受けた教育をモデルにして、教師をやるわけです。

ところで、私の授業は、出席を取っていないのです。私は、学生時代出席を取られなかったから、取りたくないのです。一方で、教務から「ちゃんと出席を取りなさい」と言われるのですけれども。私の受けた原体験みたいなものがあるから、私は取りたくないのです。私のモデルがあるのです。

ジェーンズに関しては、どうでしょうか。モデルは、陸軍士官学校です。すべてが軍隊式です。「起床一つ」「全員整列一つ」「番号一つ」「全員揃っています」。「食事一つ」「掃除一つ」「便所一つ」「授業一つ」で、晩飯が終わって、自習の時間があって、夜十時になります。点呼。「番号一つ」「全員揃っています」「就寝一」。そういう生活を、軍隊式でやったのです。非常に厳しい生活を学生達に与えました。そういうなかで、キリスト教の「キ」の字も、聖書の「セ」の字も教えていないのです。

クラークはクリスチャンであり、学者でありましたが、ジェーンズは、一（いち）平凡な、平均的クリスチャンです。奥さんが牧師の娘というだけの話で、それ以上でも、それ以下でもない。つまり、ここにも何人かおられますが、プロフェッショナルの牧師ではない。プロフェッショナルで神学を勉強したわけではない。しかし彼は、ウエストポイントで勉強した砲兵大尉であったわけです。弾をどの角度で打ち上げればどこに届くとか、そのためには風を計算に入れなければならないとか、火薬の量をこすればいいとか、爆発力をキープするためにはこすればいいのかというのは、全部計算が必要ですから、頭の中は化学、自然科学です。そういうなかで、徹底的に知識、知識、知識・・・を与えたわけです。

学生の知識は、潜在的な能力が高かったのでしょうか、どんどん進行していきました。そして、学生たちのなかで、勉強すればするほど、知識が増えれば増えるほど、新しい疑問が起こってきます。どんな疑問か。たとえば、物理学を学び、音は空気の振動によって起こるのを知ります。音の振動は、一秒間で最低一六回、最高が四万八千回あるのだそうです。人間の声の、男のベースの一番低い声が一〇で、男の一番高い声が六七八回なのだそうです。女の一番低いアルトの声が五七二回、女のキーンと高い声が、一六〇六回なのだそうです。そのうち、太鼓のドンドン、とか、犬のワンワンとかキャンキャンとか、いろんな音がこの範囲だ、というのがだんだんわかってくる。そうすると、新しい疑問が起こってくるわけです。原理としては一六から四万八千回あったとしても、人間の耳の許容範囲は、限られています。そうすると、それ以外のものは、音として存在しているはずだけれども、人間の耳に聞こえない。ここからここは、あるはずだけれども、高すぎて、人間の耳には聞こえない。そうすると、なぜこの領域があるのか、というのが学生の新しい疑問になった。

私は凡人ですから、それ以上の疑問を持ちませんでした。しかし、彼らは優秀でしたから、そういう疑問を持ちました。なぜこの領域があるのか。誰がそれをつくったのか。これをひっくり返して、今日の言葉で言うならば、人間は、創造の秩序とでも言うべき知識がある。しかし、知識を超えたところに、はるかに計り知れない偉大な力が我々の世界の中にあるのではないか。目に見える、これだけが力ではないのではないか。

同じように春に種を蒔き、そして一定の水や温度が備えられれば、秋には収穫できて、人間はその作物を食べることができる。生殖の神秘、我々は、経験的に、生殖によって子どもが生まれるということを知っていますけれども、その何億の精子と卵子の組み合わせの中で、「なぜ、これが選ばれたのか」というのは、神秘を感じませんか。もちろん、今は「子どもが欲しい」とか「欲しくない」とか「いらない」とか、いろんな言い方があります。伝統的な言い方という「子どもは神様からの授かりもの」という。このことを巡っても、いろんな議論がおこるのは、承知していますけれども。

キリスト教信仰への関心

いづれにしても、裏に見えない、計り知ることのできない創造の秩序、偉大な何かがある。そのようなことが必要なのだ、そういう理解があるのだということが見えてきたときに、ジェーンズは、土曜日や放課後に「私の家で聖書を読む会をするからきませんか」と声を掛けます。自由参加です。こういうことに非常に興味と関心を持ち始めたグループと、持たないグループがあるわけです。熊本洋学校の学生は、真っ二つに割れました。

皆さん、「神風連（しんぷうれん）」を知っていますか。九州の、しかも熊本で、非常に保守的なところでした。「日本は神の国である。神風が吹く。そういう国であるから、外国人と交渉するとは、とんでもない。純粋な日本人だけでいくべきだ」という考えです。つまり「洋服も着るな、洋食も食べるな」というわけです。天皇を中心とした国だという、そういう頑迷な価値観を持っていたのです。そして明治維新後、ついに「神風連の乱」というのが、熊本で起こるわけです。もちろん制圧されるわけですが、ことほど左様に、頑迷な保守主義者も、学校の中にいたわけです。ジェーンズの影響を受けて、西洋文明、そしてその知識、知識・・・の背後にある思想・価値観について、興味と関心を持ちはじめた学生と、そうでない学生と、真っ二つに割れていきます。

そのようなことで、自由参加で、アウトプログラムです。「放課後に、興味と関心があればお出で下さい。聖書を読みましょう」。繰り返します。ジェーンズはクリスチャンではありませんが、神学教育を受けたわけではない。たとえば、何章の何節・・・一節、二節、三節・・・と一節ずつ、ずーっと読んでいって、そして自分が読んだところについての感想を言い、疑問を呈し、「これ、よく分かりません」「なんとなく分かる気がします」「なぜか」というように、聖書をネタにしてディスカッションをし、ジェーンズが答えられるところであれば答える。しかし答えられないところは「私も分かりません」。こういう輪読をして、最後に、ジェーンズが眼を閉じてお祈りをし終わる。ただそれだけのことだったので。

学校では、軍隊式の、非常に厳しいシステムの中で動いていましたが、それでも休憩時間があるわけです。休憩時間の中で、学生達は、少しずつ関心が変わってくるのです。どういふふうになるかという、最初は休み時間があると、「将来、二十年後くらいには、我々熊本洋学校出身者で組閣をしよう」「俺たちで内閣をつくるんだ」「俺は文部省」「おまえは文部省には向いてない、財務省をやれ」とか、「俺は農商大臣をやれ」とか「俺は陸軍大臣だ」とか、「おまえが先にどうだこうだ」、「あいつに総理大臣は無理だよ」みたいなことで、自分たちで組閣をすることが、話題でありました。それぐらい、自分たちの能力に疑問を持ったことがない、意気軒昂な、頭脳優秀な青年たちがそこにいたわけです。つまり、官僚になることが「身を立て名を上げ、やよめゆめ」のテーマだったわけです。しかし、学問が進んでいくことによって、国が栄えるというのはどういふことか。国が豊かになるっていふのは、何か。「官僚になること」から、学生の問題意識は変わっていきます。

慶應と同志社とぶつかる場所がありますが、福沢の慶應は、商学部、商学を中心にスタートをさせます。国が豊かになるのは、国立大学を中心とした、東大中心の、官僚養成の学校、日本の教育システムの根幹はそれであったのに対して、福沢の慶應は、そうではない。これは私も同意です。物が豊かに生産され、そして流通し消費される。このメカニズムが豊かに回っていくことが、国が豊かになることで、官僚養成ではない。だから、商学、経営学、経済学が大切なのだ、となります。

熊本洋学校の学生たちも、それに気がついていきます。物の豊かな国になるためには、船が必要だ。船を造る技術が要る。いや、船が入る港も必要だ。港に陸揚げをしたら、これをそこからあそこに運ぶための運送手段が必要である。それは石炭が何よりも必要であるというようなことで、築港とか土木とか産業とか、いろんな分野に学生の関心が変わっていくわけです。将来組閣をするということから、次のステップが変わっていくわけです。

皆さんは、どうですか。小学校・中学校・高等学校の時代に、いい教師と出会って、問題意識が変わっていくという経験がありましたか。そういう、鮮烈な出会いが、私たちにあったのでしょうか。彼らは少なくとも、ジェーンズからそういう影響を受けていきます。ジェーンズは、大の官僚嫌いでありました。しかし、彼らの意識は官僚からそういうところに移っていき、そしてついに最後の段階となります。熊本では自由に「聖書を読む会」が起こっていきます。

ここで、もう一つはっきりさせておきたいことは、二五〇年の鎖国の時代が続いていたなかでは、キリスト教は邪教であった、邪教感というのが非常に強くあったということです。今、この中にクリスチャンの方がおられます。クリスチャンでない方もおられます。宗教に特段の興味と関心がない、という人もいます。しかし、おそらく皆さんは同志社大学に行く、ということとは、「俺、キリスト教、信じないけど、まあ、悪い宗教ではないんじゃないの」「オウム真理教、あれは嫌だ。だけどキリスト教、俺は信じはしないけど、悪い宗教じゃないんじゃないか」。すでにその段階では、私たちの、皆さんの、キリスト教への理解は、マイナスではなくて、何となくプラスアルファが付いているのです。しかしこの時代、キリスト教に対する認識というのは、大幅なマイナスであった。邪邪感があった。

のちに同志社の総長になる海老名弾正の回顧談が残っています。ジェーンズにひかれて、「聖書を読む会」に出るようになった。「耶穌の秘密は、どうもあのお祈りにあるのではなからうか」。聖書を読んだ後、ジェーンズが手を組んでお祈りをしているときに、海老名は「ここで何か、火花が飛びか、稲光が・・・何かあるんじゃないか」と思って、まじまじと目を開けて見ていた。何も起こらない。当たり前です。起こるわけがないのです。しかし、そんな思いで、純真な、知的好奇心溢れる少年は、ジェーンズの影響を受けていきました。ジェーンズに「なぜお祈りをするのですか」と訊くわけです。ジェーンズが「祈りは人間として当然果たすべき務め。創造者に対するobligation（義務）だ」と言うのを聞いて、心に光が差し込んだ、と述懐しています。

それは、日本人が通常持っている宗教観、たとえば、五穀豊穡、家内安全、交通安全というような、それらの祈願が間違っているというようなことはもちろんなのですが、「このためにはこの神様、そのためにはその神様」ということを超えて、もっと目に見えない大きな「天」という、そしてそれが「神」というものに繋がっていく。目の前の、あのためのこのための「神」ではない、もっと大きな「天の父」という、こういう考え方があった、それが人間としての当然の義務なのだ、というふうに答えられたときに、それは海老名にとつてみれば、「啓示」として、スカーンと魂に食い込んだという、そういう経験をしています。この「天の父」、この時代、「神」というのをこんなふうな字で表しておりました。日本の「神」は、「八百万（やおよろず）の神」と混同するので、聖書の翻訳などでも、「上帝」とか、あるいは「天帝」という言葉を翻訳して「ゴッド」を当てていました。

「奉教趣意書」

そのように、聖書を読みたいというグループが、明確に一群起こってきて、それに対して反聖書グループが生まれてきて、青年の純真な思いというのが双方で激しく格闘し合います。そしてそのなかでボルテージが高まった一八七六年、神戸にいたときにクリスチャンになって熊本に赴任してきた佐々木という軍医と、ジェーンズが語り合い、「日曜日に礼拝をしましょう」ということになって、熊本で日曜日に礼拝が始まった。それにその生徒達がぞろぞろ自主的に参加しはじめていき、そしてその後には花岡山に登って、自分たちのストーリーをお互いに披瀝（ひれき）し合う。熊本洋学校に入るまで、端的に言えば官僚養成、自分は将来大臣になると思っていたのが、熊本洋学校に入ってジェーンズと出会って、実業の中で生きていくことに意味があると考えた。船を、工場を造る。しかし、もっと大きな世界のために私は働かなければいけないのだ、それはキリスト教だ、というように価値が三段階に展開していくわけです。これを一人ひとり、マイストーリーとして語り合う。そういうなかから、そのボルテージが破裂して、「奉教趣意書」を自分たちで書いて、そして自主的に署名をしたのです。

札幌バンドの場合、クラークは、署名することを要求したのです。キリスト教を信じなさいと言ったのです。それに対して、熊本洋学校の場合は、生徒たちの知的レベルが一定の水準になるまで、ジェーンズは教えませんでした。キリスト教の「キ」の字も、聖書の「世」の字も言いませんでした。そして、知的レベルが上がったところで、生徒たち自身が内発的な新しい疑問を持ち始めたときに、初めて聖書を与えて、しかも一緒に読むという形で、キリスト教の芽を広げていくことになります。

この奉教趣意書、後ろに出てくる名前を見て、年齢を調べたのですけれども、だいたい十六から二十一ぐらいまでです。今でいうと高校生から大学生の年代で、学生の皆さんの年齢に該当するわけです。これらの文章を自分たちで書いたわけです。これは、改めて言うまでもないことですが、全員が武士階級ではなかったにせよ、基本的に武士階級であり、漢文は読める、そういう素養を小さいときから叩き込まれており、という基礎的教育を受けていた人たち、ということがあってこのような文章になるわけです。

余輩嘗(かつ)テ西教ヲ学ブニ頗(すこぶ)ル悟ル所アリ、爾後(じご)之ヲ読ムニ益々感発シ欣戴(きんたい)措カズ遂ニ此ノ教ヲ、皇国ニ布(し)キ大ニ人民ノ蒙昧(もうまい)ヲ開カント欲ス 然リト雖(いえど)モ、西教ノ妙旨ヲ知ラズシテ頑固旧説ニ浸潤スルノ徒未ダ勤(すくな)カラズ、豈(あに)慨嘆ニ堪ユベケンヤ 是時ニ当リ苟(いやしく)モ報國ノ志ヲ抱ク者ハ宜ク感発興起シ生命ヲ塵芥(じんかい)ニ比シテ西教ノ公明正大ナルヲ釈明スベシ是レ吾輩ノ最モ力(ちから)ヲ竭(つく)スベキ所ナリ 故ニ同志ヲ花岡山ニ会シ同心協力シテ以テ此ノ道ニ従事センコ(こ)トヲ要ス

一、凡ソ此ノ道ニ入ル者ハ互ニ兄弟ノ好(よしみ)ヲ結ビ百事相戒メ相規シ惡ヲ去リ善ニ移リ以テ実行ヲ奏スベシ

一、一度此ノ道ニ入りテ、実行ヲ奏スル能(あた)ハザル者ハ是レ上帝ヲ欺クナリ 是レ心ヲ欺クナリ 如此キ者ハ必ズ、上帝ノ謹罰(けんばつ)ヲ蒙(こうむ)ル

一、方今(ほうこん)皇国ノ人民多ク西教ヲ拒ム故ニ我徒(われら)一人此ノ道ニ背クトキハ衆ノ謗(そしり)ヲ招クノミナラズ終ニ吾徒(われら)ノ志願ヲシテ遂ゲザラシムルニ至ル 勸メザルベケン哉、欽(つつし)マザルベケン哉云々。

こういう文章を自分たちで書いて、そして自発的に、後に名が残る人たちは、署名をしたのであります。文言は、古くさいというか固い文章でありますけれども、言っている意味はたぶんお分かりかと思いますが。我々は、熊本洋学校で新知識を得た。家族や、巷の人間はそれを知らない。かわいそうに、哀れな者よ、俺たちが教えてやらなければならない、というすさまじいばかりの使命感です。教えないのは罪だ、というプライドです。

「是時ニ当リ苟モ報國ノ志ヲ抱ク者ハ」、これは、この教えを知り広めていく、そうして国を建てていくということが、直接、愛國的な行為になるのだということです。

「西教」、キリスト教と書かれておりません。西の教えですから、厳密に言えば、西洋文明と、そのキリスト教は切り離せない。日本の近代化というのは、西洋のテクニックを学び、西洋のシステムを学び、そして、信じる・信じないは別として、ついに「西洋の魂」にきちんと向き合うことなしに、「和魂洋才」でやってきたので、宗教に対する正しい批判も正しい認識も、し難くて、「宗教、恐ろしい」「危ない」とか「触れないほうがいい」ということになります。その一方で、近代的知性と基本的な人権の尊重というのはどこで出てくるのか、ということについてのきちんとした認識が、ついに日本では今に至るまで弱い、と私は思いますけれども、どうでしょうか。基本的に「脱亜入欧」と言いながら、その枠は和魂洋才であった。このことの意味を考えてみたいと思いますがどうでしょう。

ちょっと話を飛ばしますが、似たようなことが、ちょっと後に朝鮮半島に起こります。朝鮮半島でも西洋の文明が入ってくるときに、それに抵抗して「我々は東洋人である」と考え、反乱が起こります。それが「東学」といわれました。ここでは西教といっていますが、東学、東洋の秩序、伝統、考え方で国を建てるべきだ、西教は要らん、というように、東西というのはこういう形で歴史の中に絡み合ったんですね。日本型の西洋文明の受けとめ方があった。これは和魂洋才であったということなのですけれども。

先ほどちょっと言いました「上帝」、今は聖書の中で、この「神」を使うのですが、これは、GODを翻訳するときに、日本の中では「八百万の神々」をイメージするので、よろしくないであろうということでした。日本にやってくる以前の神島が幕末期に読んだ聖書は、漢訳の聖書でありました。すでに中国で印刷・翻訳されて出版された漢訳のものが日本に入ってきて、その中にはGODを「上帝」と翻訳して、あるいは「天部」というような字が当てられていました。ですから、英語で読みながら、こういう「上帝」という言葉をここで使ったわけです。

余談です。キリストの時代、宣教師が日本にやってきたときに、このGODを訳そうとして訳せませんでした。ですから、聖書の言葉にある「神は愛である」は、訳せなかったのです。「愛」という言葉もなかったのです。日本語の世界で、「神は愛である」という、その「愛」という言葉はなかったのです。もちろん「恋」はあったし、殿様を「慕う」という言葉はあったし、親を「敬う」という言葉はあったし、だけど「愛」、LOVEという言葉は日本語の概念になかったのです。ですから宣教師は訳すのに困ったのです。翻訳の難しさ。宣教師はキリストの時代、「神」を何と訳したか。大浦天主堂、ありますね。「天主」、もう訳せないで、そのままラテン語をカタカナに直して「デウス」とか、そのままやってしまったケースもあります。「愛」、宣教師たちの時代に何と訳したか。一番近い言葉に、仏教用語の「慈悲」という言葉があったのです。しかしこれは明らかに仏教の用語である、使えない。何と訳したか。「お大切」です。「神は愛である」を「神はお大切」と訳しました。一人ひとり大切。私も大切、あなたも、あの人も、この人も、大切。年を取っていくのが、若かりうが、体が不自由であろうが、一人ひとり大切。この考え方が一貫していれば、いじめなんか起こらないと思ってしまいます。

同志社と熊本バンド

話を進めます。こうして、このようなことが青年たちを中心に起こった。親の側から見れば、優秀な我が息子が、将来は大臣か、将来は・・・と思っていたのが、あろうことが耶蘇になったわけです。喜んでしょか。私の理解するところによりますと、「我が優秀な息子が、東大・京大に入り、卒業してというのが、あろうことかオウム真理教に入ってサリンを造っているよ」という話になると似たようなショックだと思いました。もちろん、ここでサリンを造っているわけではないのですけれども、それぐらい「頭脳優秀なのが、そんなところに・・・」と、理解を超える行動でありました。ですから、多くの生徒たちは、座敷牢に入れられ、そして「ご先祖さまに申しわけない」「あなたを殺して私も死ぬ」ということであつたり、「殺す」って言うけれど「殺してください」って首を出せるのだから、にっこりさつちもいかななくて峰討ちで首をバシッと叩いたり、とんでもない大混戦が起きました。これが熊本バンドの青年たちの姿であつたわけです。「よかつたねえ、教会に行つてクリスチャンになる」、そんな話ではなかったのです。このなかの宮川(みやがわ)経輝(つねてる)、阿蘇神社の神官の息子でありました。父、兄から徹底的にしぼられます。徳富(とくとみ)猪一郎(いいちろう)、父親は日ごろ非常に温厚な人でありました。しかし、奉教趣意書にサインをしたということで激怒して、聖書や英語で書いてある書物を全部、焼き捨てました。吉田(よしだ)作弥(さくや)場合。先ほど言いました。父から「信仰を捨てよ、捨てないならば手討ちにする」「どぞぞ」。峰討ちになる。金森(かなもり)通倫(みちとも)の場合。一家総掛かりで説得されて座敷牢に入れられる。横井時雄の場合。母から言われます。「死んでしまった夫に申しわけない。自決しろ。自決できないならおまえを殺して私も死ぬ」となります。大混乱です。一方、学校の中には神風連グループもいるわけです。学校の中も収拾がつかなくなってしまう。

そういうなかでジェーンズは、デイヴィスに手紙を書きます。一八七五年、十一月二十九日、同志社英学校が京都に創立したらしい、というのは知っていました。ジェーンズしてみると、八人でスタートした。いつまで続くか。その八人の、それ以前の教育のレベルもバラバラで、できたは良いけれどいつまで続くか、非常に不安に思っていたところ、熊本から、未知のジェーンズから手紙がきて、「ここまで教育をした青年たちの、あとの教育を同志社で面倒見てもらえないだろうか」。ジェーンズは回顧しています。「天からの光に接したようだった」。これで学校に生徒がくる。続けられる。ジェーンズは、デイヴィスや新島と手紙で連絡を取りながら、そしてジェーンズは信徒であつたのですけれども、緊急事態として洗礼を授けて、そして座敷牢に入れられてバラバラになってしまつてお互いの連絡もつかないのを見計らいながら、しかし語りながら、熊本からぞろぞろ、勘当された状態で京都にたどり着いてくるんです。一八七六年の六月以降です。

同志社に、彼ら熊本の連中が入り、熊本の血が入ったことで、同志社は、実同志社になりました。ですから、その時代、同志社創立一年後の学内では、京都弁は聞かれなかったのです。全部九州弁だったのです。「おまえら、ほんなこつかい」「なんぼしょつとね」というのです。もうボロボロの、乞食同然の格好で京都に入ってきて、そして同志社で過ごすわけです。これが、今日の授業のテーマです。同志社を同志社たらしめた青年たち。この、彼らが同志社にきたことによって、実同志社が同志社になったのです。私は、この話は新島を蔑むことには決してならないと思います。

新島は、最初にアメリカの大学で理学士(Bachelor of Science)の学位を得て卒業した人であり、そして大学院レベルのアンダーヴァー神学校を正規に卒業出来た第一号であつたにも関わらず、彼は学者ではなかったのです。彼は同志社で教えていたときに、第二代同志社社長になる小崎弘道、彼は神童と呼ばれるくらい頭のいい青年でありましたが、新島の授業のなかでこういうエピソードを残しています。新島が授業で使っている本を図書館で調べてきて、「新島先生が使っているこの本はこの立場、じゃあ俺はそうではない立場の、この本を読んで・・・」と準備して行って、授業のなかで、「先生、質問。先生の授業ではこういうふうに言っていますけれども、こういう見解についてはどうなんでしょうか」。新島はついに、にっこりさつちもいなくなつて、黙つてしまう。小崎は喜んでくれるわけです。「やったぞ。先生を追い詰めてやった」。それぐらい、知的なレベルが高かつたということを示しています。その小崎が書き遺しています、「先生をそうやってやつけたけれども、人間としての新島先生には、誰しもが心服した」というのです。ですから、新島の知識の高さ、あるいは学歴の高さによって同志社は成り立ったのではなく、学生と新島との人間関係のなかに、同志社は生み出されていったということを私は痛切に思います。

この学生の中から、全員が同志社にきたわけではありません。東京大学に行って、「つまんねえ」と言つて同志社に入ってきた者もいますし、全員が牧師になつたわけでもありません。政治や宗教や文学や、実にさまざまな分野に出ていきました。これが同志社だったわけです。このことをしても、「リベラルアーツの同志社英学校」であつたということを知ることができます。これが同志社の同志社たるゆえんであつたと思いますし、このことは、今の私たちにとってみれば、「どのような学生であつて欲しいのか」とか、「どのような学校であるべきなのか」とか、「どのような教師としてあるべきなのか」とか、あるいは「どのような職員としてあるべきなのか」とか、「達成目標って何なのか」ということに繋がります。

学生の皆さんも感じているかも知れませんが、非常に厳しい文部科学省の指導とか、点数化とか、選別化、そういったことが結局は履修の偽造みたいなところまでいくわけですが、そのような外部評価のABCがあつて、私たちも学生もABCの評価で、「就職率の高い大学」というふうにかんがえるのかもしれませんが、そもそも「教育とは何か」ということを、学校が、大学が、そして私たちが、どこかできちんと踏まえながら、教育の現場に、あるいは皆さんが学ぶ現場にあつて欲しい、と痛切に感じるのであります。ということで終わりたいと思います。ありがとうございました。

